

意見陳述

控訴人 小寺卓矢

自己紹介

原告の小寺卓矢と申します。私は、大学で遺伝子工学を含む生物学を専攻し、その後、自然写真家ならびに自然写真絵本作家として活動してきました。その中で特に力をいれたのは、子どもたちに自然や生命の尊さを伝えることです。これまで、著作の読み聞かせなどを通じ、全国各地の子どもたちと交流を重ねてきました。

そのような者として今日は「子どもたちへの責任」という観点から意見を申し述べます。



原発事業の「無責任」

まず、2011年のあの東電福島第一原発の事故から今日まで、私が日々ますます確信を強めている思いを申し上げます。それは、原発事業がなんと「無責任な営み」であるかということです。

システムの暴走を封じ込める決定的な歯止めが無い。漏れ出た毒性物質の拡散を食い止める確実な手段も無い。そこにあるのは「暴走するはずがない、漏れ出るはずがない」という希望的観測ばかり。工学技術への過信と「備えの甘さ」が最悪の形で露呈したのがあの事故でした。

それ以降も備えの甘さと場当たり的な対応は続きます。例えば、事故原子炉の廃炉ロードマップはどうでしょう。あの致死的なデブリがせめて、取り扱い可能な状態になるのは一体いつですか。すでに環境中に降下してしまった放射性物質も、あれらは、いつ無毒化されますか。汚された森、野原、湖、海に対する「原状回復責任」はいつ果たされるのでしょうか。北電の皆さん、もし仮に皆さんの当事者なら、皆さんはその責任を果たすことができそう

ですか？

忘れてはならないことがあります。そうした場合に、被災した方々の暮らしはずっと、奪われたままです。

今から3年前、私は仕事の一環で、浪江町の帰還困難区域を訪ね、一時帰宅中の被災者から直接お話を伺ったことがあります。長らく放置されたままのご自宅。雑草と雑木に覆い尽くされた先祖伝来の農地。ネズミの糞にまみれた台所。獣に踏み荒らされた子ども部屋。そこにあの日以来置かれたままの赤いランドセル。そんな風景の前に、被災10年経ってもなお「悔しい」とこぼすその方の表情を、私はいまも思い出します。

しかし、その苦悩の元凶たる毒物を環境中に撒き散らした事業者は、ある事例において「それは無主物だ」と主張し、対応責任を放り出す。また、昨年、漁業者との約束をあっさり反故にした上で、実証的な検証もなく断行された、文字通り前代未聞の「炉心に触れた水の公海への積極投棄」。これもまた、場当たり対応の末の責任放棄の積み重ねに他なりません。そもそも「数万年に渡るケアが必要な危険「ミ」が生じる」という事実が数十年もの昔から想定さ

れていたのに、それをどこで処分するかさえ、21世紀もすでに1/4を経ようかという今になっても一向に定まらない。それどころか「再稼働して」「ミを増やします。あとの監視は、後世の皆さんでどうぞよろしく」と、わざわざ厄介の度合いを増しながら、まだこの世に存在もしていない他人にツケを先送りする。道理が通らないにも程があります。

原発をめぐるなんと多くのことが理不尽、不合理なのでしょう。か。そうした状態や構造を「無責任」と言わず、ほかに何と表現ができるでしょう。科学論や技術論、経済合理性を云々する以前の、なんと深刻な責任感の欠如、責任倫理の欠如でしょう。

子どもたちの幸せ

最初に述べたように、私はこれまで、写真絵本作家というなりわいを通じ、たくさん子どもたちと交流してきました。その中で強く確信に至ったことがあります。それは「子どもたちは、生き物の本性として、自分自身の人生をより幸せなものにしたいと願っている。そして、社会や他者との関係において出来る限り正しくかつ誠実であろうとしている」ということです。その傾向は、どうや

らより幼い子らほど顕著であるような気がします。蛇足を加えるなら、我々がいまこうして裁判所に集っていること自体が、じつはその延長線上のことなのだとは思っています。

その上で、私は一人の大人として、こころ肝に銘じます。

「どの子も理不尽な抑圧に邪魔されず、それぞれに備わった生命の力を存分にまっとうできるようなしてあげること。それは、ヒトが社会的動物である限り、人類史を貫いて果たし続けなければならない責務である。そしてそれは、子どもたちの誠実さに見合うだけの誠実さを持って、果たされなければならない」という思いです。

しかし、2011年の春以降、私たち大人は彼らに対し何をしてきたでしょう。心安らげる場所から引き剥がし、異常事態にも物言わず順応することを強要し、その一方で「想定外」を言い訳にしながら先に述べたような深刻な理不尽、不誠実をこれでもかと見せつけてきました。

また、彼らの心と体に、簡単には拭い去ることのできない健康不安をも植え付けました。その中には、言葉にするのも苦しいのですが、

将来の生殖や遺伝に関する懸念も含まれていることでしょう。

あの事故の後、テレビで観たある映像の印象が、いま私の頭にこびりついていきます。被災地域の10代から20代と思しき男女が、放射能汚染について問うカメラに向かって、自嘲した口ぶりで次のようなことを言っていました。

「もういいよ。どうせわたしたち『モルモット』だから」。

もしかしたら、彼らが口にしたのは『モルモット』ではなく『実験台』という言葉だったかもしれない。いずれにせよ、私たち社会は、この言葉と態度にどう向き合うべきでしょう。

私自身、現在20代と10代の二人の娘の父親です。人の親として、私は、今からでも「ボロボロ」にされた彼らのへ生命の尊厳を原状回復させてあげたいと思います。でも、どうすればそれが可能なのか、私には分かりません。「しんどいことはもう忘れ、ただ前を向いて生きろ」と愚にもつかない気休めを言い続ける以外ないのでしょうか。もう責任の取りようが無いではないですか。

だから、せめて私は、今後もう二度と、この北海道においても、子どもたちが決してそんな気持ち

を抱かずに済むよう、彼らの暮らしの中から不条理な抑圧の芽を取り除いてゆきたいと思うのです。すなわち、無責任と倫理欠如に依って立つ原発事業を速やかに終わらせる。私は、それこそが、何らの言い訳も、みっともない場当たり対応も無しに、私たちが子どもたちのために、いまここで遂行できる「責任ある営み」の第一歩だと信じます。

写真家として20年以上自然と向き合ってきた、私は今つくづく実感します。自然の営みは人間の想定通りになりません。私たち大人務めは、そうした人智を超えた自然への「畏れの気持ち」を、子どもたちの中で、いま命あることの「奇跡」に対する驚きや感謝へと昇華させてあげることです。決して、自然を呪い、人類の無力に絶望させることではありません。

裁判官の皆さま。どうぞ、何世代先の子どもたちに対しても「ほつ、私たち大人はこの時こう決めたんだよ」と胸を張って示し続けることのできる、賢明なご判断をなさってください。切にお願いいたします。意見は以上です。

5・31勝訴記念 どうする泊?! 報告

ライラックの花が香る小雨の中、昨年に続き2回目となる「5・31勝訴記念 どうする泊?!」行動を札幌チカホ空間で行いました。2回目となる今回は今春開始した鈴木北海道知事宛の『泊原発を再稼働させない』署名活動を中心に取り組み、200筆を越える賛意をいただきました。多くの方との対話の中には「家族が北電に勤務し署名は出来ないが趣旨には賛成する」という方もおり、あらためて原発の罪深さと泊原発の早期の廃炉を再認識しました。

